

## 宮沢賢治の作品に描かれたカラマツ林の景観

— 北原白秋の詩との比較 —

島田 直明\*・米地 文夫\*\*

**要 旨** カラマツは宮沢賢治作品への登場頻度の高い樹木である。そのカラマツ林やその周辺の景観について賢治の描写を分析するとともに、同時代の代表的詩人北原白秋の作品と比較検討を行った。本論文では特に心象スケッチ『春と修羅』のなかの作品群に描かれたカラマツに着目した。それらの多くは岩手山麓の牧草地や放牧地の防風林としてのカラマツ林であった。賢治の作品から1920年代の岩手山麓は、草地や草地から遷移が進んだ森林、カシワ林などさまざまな植生タイプがみられ、また草地を囲むようにカラマツ林が列状に連なる景観であったと読み取れた。旧版地形図や岩手県統計書などの資料から判読した当時の景観も同様であり、賢治が『春と修羅』の作品群において正確に景観を描写していたことが検証できた。

一方、北原白秋の有名な詩「落葉松」は、カラマツ林の中に歩み入り、また歩み去る己れを抒情的に詠いあげた。この詩人の絶唱ともいうべき作品ではあるが、カラマツ林の景観そのものについては全く描写していない。これに対して、賢治はカラマツ林の景観をナチュラルリストの眼で観察し、心象スケッチという形で具体的に描写・記録した。彼はのち、カラマツを用いて景観を造る「装景」をも考えていたのであった。

### キーワード

宮沢賢治、『春と修羅』、カラマツ、景観、北原白秋

### はじめに

カラマツは、マグノリヤの類やドイツトウヒ、ギンドロ(ハコヤナギ)、ハンノキ、カシワ、シラカバなどととも、宮沢賢治が最も好んだ樹木の一つで、彼の好みの木々を挙げれば必ず十指のうちに入るであろう。

実際、作品中にはカラマツがしばしば登場し、桜田(1996)によればカラマツ(ラリックスを含む)は賢治作品中の32ヶ所に登場する。これは樹木中では14位であるが、クリ、リンゴ、クルミ、ブドウなどの果実の登場する回数の多いものなどが上位にあるので、これらを除けば、数的にも10位以内に入る。

三浦・米地(1999)は、賢治の短歌、詩、童話に載った植物の頻度評価を試み、頻度の高いもの

を賢治フローラの中心的植物としたが、木本植物ではマツ類、カシワ、カバあるいはシラカンバ、カラマツ、クリ、クルミ類、スギ、ナラ類、ハンノキ、ヒノキ、ヤナギ類がこれに当たるとした。

この小論では宮沢賢治がカラマツのどこに魅力を感じたのかを、主にカラマツ林の景観を中心に探り、同時代の代表的詩人北原白秋の場合と比較して、賢治作品に描かれたカラマツ林景観の意義と特色とを捉えたい。

### 1. 『春と修羅』に描かれたカラマツ

宮沢賢治の作品におけるカラマツの表記はさまざまである。心象スケッチ『春と修羅』の中からその例を掲げてみる。公刊された唯一の詩集『春と修羅』(これを第一集と呼ぶ：記号①)、および同補遺(①補)、未刊行に終わった『春と修羅』

\* 岩手県立大学総合政策学部 〒020-0193 岩手県滝沢村滝沢字菓子152-52

\*\* ハーナムキヤ景観研究所 〒025-0063 岩手県花巻市小舟渡237-3 イギリス海岸ギャラリー内

第二集 (②)、およびその補遺 (②補)、『春と修羅』第三集 (③) からカラマツについて取り上げたものを掲げた<sup>1)</sup>。

からまつ (「小岩井農場パート三、パート七」①、  
「一本木野」①、「烏」②、「海蝕台地」②、「岩  
手軽便鉄道の一ヶ月」②)

から松 (「小岩井農場パート四、パート七、パート  
九」①、「滝沢野」①、「遠足統率」②)

落葉松 (「らくえふしよう」と振り仮名) (「小岩井  
農場パート四」①、「落葉松の方陣は」\*②)

落葉松 (「ラリックス」と振り仮名) (「高級の霧」①)

落葉松 (振り仮名なし) (「第四梯形」①、「旭川」  
①補、「森林軌道」②)

ラリックス (「小岩井農場パート九」①、「印象」①)

ラリックス (「ラリクスランダー」という造語の一部)  
(「岩手軽便鉄道の一ヶ月」②)

Larix (「厨川停車場」①補)

\* : 「半陰地選定」の題で呼ばれることもある。

なお、第二集補遺と第三集にはカラマツ関連の語  
は登場していない。

これらの作品の内、「小岩井農場」(雫石町)は  
岩手山南麓、「滝沢野」(滝沢村滝沢)、「一本木野」  
(滝沢村一本木)、「厨川停車場」(盛岡市厨川)は  
岩手山東麓と、それぞれのタイトルの地名から描  
かれた場所が理解できる。「印象」と「高級の霧」  
は「岩手山」と同じ日付 (一九二二、六、二七)  
となっていることから、これらの作品も岩手山麓  
を描いたものであると思われる。また以下の作品  
は作品内の地名から岩手山南東麓のカラマツを描  
いたものであることが引用した部分の地名からわ  
かる (七つ森：雫石町七つ森、三つ森山：八幡平  
市平笠)。

「第四梯形」

早くも七つ森第一梯形の

「森林軌道」

南はうるむ雪ぐもを

盛岡の市は沈んで見えず

三つ森山の西半分に

「遠足統率」

七つ森ではつゝ、どりどもが

「岩手軽便鉄道の一ヶ月」はタイトルから現在の  
JR釜石線である花巻-仙人峠間の岩手軽便鉄道  
周辺の光景を描いている。「烏」、「海蝕台地」、  
「落葉松の方陣は」の三作品はどこを描いたもの  
かわからないものの、カラマツの登場する作品は  
「旭川」を除けば、ほとんどが岩手県を舞台とし  
ており、特に岩手山麓のものが多いと捉えてもよ  
いであろう。

以上は『春と修羅』の題のもとに纏められ、も  
しくは纏める意図のあった口語詩における用例で  
あるが、その他の口語詩のなかにもカラマツは多  
出し、「装景手記」には変わった形態を持つラリ  
ックスに関する詩があるほか、表題のない〔あし  
たはどうなるかわからないなんて〕と始まる詩稿  
や「軍馬補充部主事」、「春 水星少女歌劇団一行」、  
「冬のスケッチ」、「展勝地」、「奥中山の補充部  
にては」などの詩にもカラマツが表されている。

またカラマツは童話にも散見され、「沼森」、  
「おきなぐさ」、「ビヂテリアン大祭」がある。「ビ  
ヂテリアン大祭」はカナダのニューファンドラン  
ド島が舞台であるが、「沼森」は作品中の地名か  
ら岩手山南東麓の滝沢村が、「おきなぐさ」は次  
のように描かれていることから岩手山南麓が舞台  
になっていることがわかる。

それは小岩井農場の南、あのゆるやかな七  
つ森の (後略)

賢治が北上山地の牧野でもカラマツを見ている  
ことは、書簡 (保坂嘉内あて1920年) に外山高原  
の四月の様子を、次のように記していることから  
わかる。

ゆるやかな丘の起伏を境界線の落葉松の褐  
色の紐がどこまでも縫ひ、黒い腐植のしめっ  
た低地にはかたくりの花がいっぱい咲き

(後略)

伊藤(1998)が「賢治は唐松をラリックスまたは落葉松などと呼び、とくに好んだ樹木の一つだったようである。」と書いているように、カラマツが賢治の好みの樹木であったことは確かであろう。

## 2. 賢治が観たころのカラマツ

カラマツの本来の分布地域は宮城県から静岡県・石川県であり(北村・村田1979)、岩手県には自生しない。カラマツは自生地では日当たりのよいところに生育し、土壌の悪いところにも生える陽樹で、生長が早いので防風林や防雪林としてよく利用される(信州大学農学部林学教室編1962、北村・村田1979、奥田1997)。

岩手県にカラマツが植栽されたのは小岩井農場において1893(明治26)年であるとの記録があり、これが一番古い記録であろうと言われている(下田2002)。また岩手山北麓八幡平市松尾の国有林内には1901(明治34)年にカラマツ林が植林されたことを記念した造林記念塔がある。いずれの資料でもカラマツ苗木は長野県から運ばれたものであったと記されている。これは、井出(1992)の、明治期に信州蓼科山採種のカラマツを岩手県遠野などへ移出した、という記載と照応する。

宮沢賢治が『春と修羅』の心象スケッチというかたちで小岩井農場や岩手山麓周辺のカラマツを記録したのは1922年以降のことであるから、植栽されてから最も時間が経ったもので20-30年生のカラマツ林を見ていたことになる。カラマツは生長速度の早い樹木であるものの、20-30年生程度ではそれほど立派なものではなかったのではないだろうか。カラマツ林分収獲表によれば20年生の林木は胸高直径15-17cm、樹高12-14m程度である(信州大学農学部林学教室編1962)。

## 3. 賢治が観たころの岩手山麓の景観

現在、盛岡市・雫石町・滝沢村・八幡平市の岩手山麓にはカラマツ、アカマツの樹高20m程度の

並木が多くみられる。並木の見られる施設や地区を示すと東北農業研究センター、森林総合研究所東北支所(以上盛岡市)、家畜改良センター岩手牧場、岩手県農業研究センター、岩手県立大学、相ノ沢牧場、県肉牛生産公社滝沢牧場、一本木上郷地区(以上滝沢村)、小岩井農場(雫石町)、上坊牧野(八幡平市平笠)などであり、岩手山麓では至る所にみられる(付図-1参照)。その中で盛岡市下厨川から滝沢村砂込までの国道4号および同282号沿いの約6kmの並木は岩手県の環境緑地保全地域として指定、保全されている。指定要件としては沿道緑地と背後の山岳、森林、草原などがよく調和し、良好な自然環境を形成していることとされている。先に挙げた施設や地区においても同様に並木の周囲は牧草地や放牧地であることが多く、草地と並木の背後に岩手山が聳えるという組み合わせが岩手山麓を特徴づける景観であるといえる。

岩手山や小岩井農場を始め、岩手山麓に賢治がよく訪れていたことを示す作品が数多く残されている。そこで1911-12(明治44-大正元)年および1939(昭和14)年の地形図(付図-2)や岩手県統計書、滝沢村誌(福田1974)などを手掛かりに、賢治が歩いた当時の岩手山麓の植生や景観を考えてみたい。

1905(明治38)年の岩手県統計書(岩手県1905)の原野の欄には、特に広いものが取り上げられ、記載されている。その中に岩手山麓の原野である“茨島野”<sup>2)</sup>がみられる。以下、茨島野に関わる部分を示す。

「岩手山麓ノ曠野ハ松林ノ處々ニ散在セルヲ見ルノミ茫々トシテ東北南ニ互リ(中略)

尚原野中ニハ有名ナル小岩井農場、岩手県種畜場、岩手県種馬所等アリ」

原野のリスト中では茨島野は東西二里三十町(約11km)、南北五里六町(約20km)とあり、広大な原野があったと記されている。藩政時代には調練場・大筒試射場(岩手県教育委員会1980)や鹿

狩り(遠藤1994)が行われた地域であった。東端が北上川、北端が松川(北上川支流、岩手山北麓を東に流れ、玉山村川崎で北上川と合流)であるとする、西端は小岩井農場、南端は盛岡市上堂あたりということになる(島田2005)。賢治はこの“茨島野”を、童話「茨海小学校」の舞台としたのではないかと考えられる(米地2006)。

この原野について、滝沢村誌(福田1974)では現在の陸上自衛隊岩手山演習場(滝沢村一本木)から肉牛公社滝沢牧場、相ノ沢牧場にかけては馬の放牧地であり、柳沢・分れの狼森(狼久保のことか?)、逢の沢(相ノ沢のことか?)などが共有の採草地として利用されていたと記載されている。1912年・1939年の旧版地形図において陸上自衛隊岩手山演習場から肉牛公社滝沢牧場に該当する部分および狼久保周辺にかけては荒れ地と針葉樹が混じるような形で表記されている。当時の放牧地や採草地の管理方法としては、火入れによって灌木の除去を行い、草地の状況により放牧地や採草地を選択していた(森1979)。そのため当時の牧野は、放牧地のシバ低茎草地や採草地のススキなどの高茎草本群落、これらの草地から遷移が進んでノイバラやキイチゴ類などの灌木類やアカマツ群落など、さまざまな遷移段階の植生タイプがモザイク状に見られる景観であったようだ。

岩手県統計書中の原野“茨島野”の記事に記されている施設は、小岩井農場が1891(明治24)年(下田2002)、岩手県種馬所(現在の家畜改良センター岩手牧場)が1896(明治29)年(土井ほか2004)、岩手県種畜場(現在の岩手県農業研究センター畜産研究所)が1901(明治34)年(岩手県1902)にそれぞれ開設された。いずれの牧場についても開設にあたり、牛馬の脱走を防ぎ、人の往来を助けるために、土塁を築き、防風林が作られた。その防風林にはアカマツやカラマツが使われることが多かった。土塁については1911-12年の旧版地形図に多数図示されており、高さは1.3-1.5m程度であったと記録されており、現在でもその一部は姿を留めている。

このように賢治が歩いた頃の岩手山麓は、採草

地や放牧地などの草地を中心に、草地から遷移が進んだ灌木類やアカマツ林など、さまざまな遷移段階の植生タイプがモザイク状に見られる地域であった。広々と開けた草地とそれを囲むような防風林という景観であったと思われる。放牧地には草本だけでなく、一部には灌木や、家畜に日陰を提供するためのカシワやミズナラなどの高木類もみられたようである。特にカシワは「殊に牧野に多し(岩手植物の会 1970)」とあり、火入れがなされていた放牧地には多くみられたことがわかる。

#### 4. 『春と修羅』にみるカラマツを含む景観

岩手山麓を舞台にカラマツを描いた作品の内、植生や景観が表されているものを取り上げ、賢治の作品ではどのように描かれているのかをみてみたい。ここでは『春と修羅』から「滝沢野」、「一本木野」、「森林軌道」を取り上げることにする。

詩集『春と修羅』に収められている「滝沢野」は一九二二、九、一七の日付があり、続く「東岩手火山」には一九二二、九、一八とある。賢治は数名の生徒と共に9月17日午後3時52分に滝沢駅に着き、分レ、柳沢を経て、翌早朝岩手山登山を行った(岡澤2005)。その途中で「滝沢野」を、山頂で「東岩手火山」を描いたようである。

「滝沢野」で描かれている植物名を順に挙げてみると、カラマツ(から松)、カシワ(柏)、カラスウリ(烏瓜)、アザミ(あざみ)、カバ(樺の木)である。

カラマツは岩手県種畜場(現在の岩手県農業研究センター、岩手県立大学)の防風林に使われたものであろう。滝沢駅から柳沢間には当時の防風林が多くみられるが、カラマツが利用されているのは岩手県農業研究センターや岩手県立大学周辺のみである。1911-12年および1939年の旧版地形図によると、滝沢駅から柳沢集落までの間で草地や防風林が見られるのは滝沢駅から分レの間の比較的平坦なあたりであることから、賢治は滝沢駅を下車してすぐに「滝沢野」を記し始めたようである。当地のカラマツは2005年に岩手県立

大学敷地内で伐採された樹木の年輪調査より約80年生であることが明らかになった（島田・竹内・平塚 未発表）。賢治がこのあたりを訪れたときには植栽直後で、まだ数mの低木が整然と列状に並んでいたようである。また低木時のカラマツは伸長生長が著しく、多くの個体が徒長していたのではないだろうか。このように整然と並ぶ徒長したカラマツの様子を賢治の興味を引き、詩の冒頭に以下のような表現があるのだろう。

光波測定の誤差から  
から松のしんは徒長し  
柏の木の烏瓜ランタン

カラスウリは林縁など明るいところに生育するツル性植物であり、作品中ではカシワに絡んでいるものが描かれ、その果実をランタンに見立てている。カシワに絡んで大きくなっていることや結実しているところから、カシワ周辺には他に大きな樹木のないことが窺え、放牧地に単木状に生育しているカシワを描いたものと推定できる。アザミやカバも明るい環境を好む種である。若齢のカラマツ防風林に隣接する牧野を描写したため明るい環境を好む植物種が取り上げられたのだろう。

一方で“暗い林”の存在も描かれており、カシワやカラマツの明るい林と対比されている。作品からは暗い林の構成種はわからないものの、森林というべき部分もあったようである。

“滝沢野”という地名は現在では用いられていないが、かつては岩手山麓一帯の原野（前記岩手県統計書中では総称して茨島野と呼んでいる）にそれぞれ地名を冠し、これも〇〇野と呼ばれることが多かった。

「一本木野」は一九二三、一〇、二八の日付があり、同じ日付に「溶岩流」がある。賢治は津軽街道（国道282号）通り、滝沢村一本木から焼走り溶岩流へと、向かっていたようである。“一本木野”という地名は旧版地形図や現在の住所表記にはみられないが、“一本木原”という表記が旧版地形図にみられる。作品の舞台は滝沢村一本木

集落の北側の地域だと思われる。以下の描写から作品が始まる。

松がいきなり明るくなつて  
のはらがぱっとひらければ  
かぎりなくかぎりなくかれくさは日に燃え

このように街道沿いの松並木が急になくなり、野原が広がり、季節柄枯れ草が多かった様子が描かれている。このあたりからは、北に20kmほどの七時雨山（八幡平市西根）まで展望が開けている草地であったようである。この作品にもカシワ（かしは）が登場している。放牧地や採草地などの草地やカシワ林がみられるような景観だったようだ。

「森林軌道」は、盛岡や三つ森山が表現されていることから、岩手山麓の柳沢集落南に敷設されていた林用軌道を舞台にしていると考えられる。この林用軌道は当時御料地であった柳沢集落の南側の森林から厨川駅に材木を出していたもので、1939年版の地形図にはみられる。

作品には、

そこから寒い負性の雪が  
小松の黒い金米糖を  
野原いちめん散点する

とあるように、草地にアカマツの幼樹が散在している様子を描いている。また「雑木」、「林」という表現もあるので、周辺には森林もみられたようである。カラマツは

裾に岱緒の落葉松の方林を  
林道白く連結すれば

というように描かれ、柳沢集落から種馬育成所や岩手県種畜場を見下ろしたときの防風林を表現しているのではないだろうか。

以上の作品から岩手山麓一帯は、草地、草地から遷移が進んだアカマツなどの森林、放牧地に多

くみられたカシワ林などさまざまな植生タイプがみられ、また草地を囲むようにカラマツやアカマツの防風林がみられるという景観であったことが推察される。これは旧版地形図などから読み取れる当時の景観と整合的で、賢治がこの周辺の景観について正確に描写していたことが理解できる。

## 5. 北原白秋の詩「落葉松」

賢治が心象スケッチを書いていた時代、カラマツは軽井沢などの高原のロマンチックな景観をつくる樹種として人々に知られており、同時代の詩人北原白秋の詩によって、さらにその印象が強められた。賢治没後には、堀辰雄の高原のサナトリウムを舞台とした作品において、八ヶ岳山麓などのカラマツ林が登場して、抒情的な景観描写の一部となっている。

白秋は1921（大正10）年8月にその軽井沢で開かれた講習会に出講し、詩「落葉松」の想を得て、同年11月発行の「明星」復刊号に寄稿した。この詩は、翌々1923（大正12）年6月には彼の第六詩集『水墨集』に収められ、白秋の絶唱と讃えられ、今なお人々に愛唱されている。

八聯からなる長い詩であるので、その初めと終わりの部分を次に示してみる。

からまつ  
落葉松

北原白秋

一

からまつを過ぎて、  
からまつをしみじみと見き。  
からまつはさびしかりけり。  
からまつはさびしかりけり。

二

からまつを林を出でて、  
からまつを林に入りぬ。  
からまつを林に入りて、  
また細く道はつづけり。

(中略)

六

からまつを林を出でて、

浅間嶺にけぶり立つ見つ。

浅間嶺にけぶり立つ見つ。

からまつをまたそのうへに。

七

からまつを林の雨は

さびしけどいよよしずけし。

かんこ鳥鳴けるのみなる。

からまつを濡るのみなる。

八

世の中よ、あはれなりけり。

常なけどうれしかりけり。

山川に山がはの音、

からまつにからまつのかぜ。

井出（1992）は軽井沢付近のカラマツについて、江戸時代後期以降に植林された記録があり、信州蓼科山の天然林から採種し、明治9年育苗に成功して以来、信州佐久一円に本格的に植林されたものであるということ述べている。井原（1997）も、軽井沢付近のカラマツは明治10年代後半以降に植林されたものであるといい、同じく白秋の詩を紹介している<sup>3)</sup>。

井出（1992）は、カラマツの生育と文学作品の関係にも触れ、明治32から38年ころ書かれた島崎藤村の『千曲川のスケッチ』に落葉松林の美しさが映し出されるには早すぎた。大正十年（一九二一）の夏、北原白秋が沓掛の星野温泉を訪れたころ、ようやく信州佐久の落葉松林はうっそうたる美林に成長していた。」と記している。

いずれにせよ、軽井沢付近のカラマツを詠ったものとして、今でも人々によく知られているこの白秋の詩のなかには、実はカラマツそのものに関する描写は全く無い。「からまつ」ないしは「からまつを林」という語が登場するのみであり、そのなかの道をゆく旅人＝詩人の姿と、その詩人が感じた寂しさが語られるのみである。

言い換えれば、白秋の詩にはカラマツの景観については何も詠われていないのであり、読者は繰り返される「からまつ」という名前から、読者なりのイメージを造るのである。カラマツは、その

名をあげるだけでも、読者の詩想を喚起するの  
であった。

## 6. 宮沢賢治作品におけるカラマツの描写

「からまつ」ないしは「からまつの林」と記し  
たのみの白秋とは異なり、賢治は、より具体的に  
カラマツを描写する。

賢治作品においては、カラマツの防風林ないし  
は並木の描写が多い。したがって、カラマツは列  
をなし、方林であり、あたかも兵士の隊列のよう  
に見えるのである。賢治の作品には電柱や並木の  
列がしばしば登場し、それらに整然とした美しさ  
や、隊列を見るような楽しさ、あるいは果てしな  
く続く彼方への憧憬、などを賢治は感じていたの  
である。それらの例をあげてみよう。

「鳥」

茶いろに黝んだからまつの列が  
めいめいにみなうごいてゐる

「遠足統率」

から松の一聯隊は  
青く荒んではるかに消える

「森林軌道」

裾に岱緒の落葉松の方林を  
林道白く連結すれば

「落葉松の方陣は」

落葉松の方陣は  
せいせい水を吸ひあげて  
ピネンも噴きリモネンも吐き酸素もふく<sup>4)</sup>

「小岩井農場パート九」

あのから松の列のどこから横へ外れた

また、カラマツが常緑樹とは異なり、四季それぞ  
れの美しさをみせることも、賢治の心を捉えた。なか  
でも春の芽吹きは次のように取り上げられている。

「小岩井農場パート三」

からまつの芽はネクタイピンにほしいくら  
ゐだし

「小岩井農場パート七」

から松の芽クリツブレースの緑玉髓  
「厨川停車場」

Larix, Larix, Larix,

青い短い針を噴き、

「一本木野」

からまつはふたたびわかやいで萌え

「小岩井農場パート九」

ラリックス ラリックス いよいよ青く

さらに、カラマツの樹幹の色彩や、カラマツの  
生長が早いことなど、賢治がカラマツに対して多  
様な認識をしていたことも、次の例からうかがえ  
る。

「小岩井農場パート四」

から松はとびいろのすてきな脚です

「滝沢野」

光波測定の誤差から  
から松のしんは徒長し

賢治が心象スケッチのなかに落葉松を登場させ  
たのは、白秋の詩の公表後である。

詩集『春と修羅』には作品ごとに日付が付して  
あるが、これらは作詩の当初の日付で、推敲後の  
ものではない。「小岩井農場」には一九二二、五、  
二一、「滝沢野」には一九二二、九、一七、「一本  
木野」には一九二二、一〇、二一、とある。

北原白秋は、宮沢賢治が特に影響を受けた詩  
人・歌人の一人である。特に賢治が盛岡高等農林  
学校学生であったころ（1915～1918年）は、白秋  
の歌集『桐の花』（1913）から強い影響を受けて  
いたことが、賢治の短歌や短編から読み取れる。

しかしながら、少なくとも詩集『春と修羅』の  
なかのカラマツに関する表現には、白秋の「落葉  
松」の影響は全く感じられない。

賢治はカラマツの景観を具体的に描いており、  
白秋は全く書いていないのである。それは賢治が  
叙景的で、白秋が叙情的だというような単純なこ  
とではない。賢治の『春と修羅』作品群は、賢治  
自らが詩ではない、「心象スケッチ」である、と

いていたように、賢治の心に映じた景観を、一種の心理学的な試みとしてナチュラルリストの眼でスケッチしたものである。その心象スケッチは、読者からみれば詩であるが、賢治にとっては自然科学的研究の手法により採集、記録されたものと意識されていた(米地・佐野2004)。したがって、植物としてのカラマツの生理や生態をも含めて、彼の心に映じた象(かたち)を具象的に描写しようとしたのである。

ところで賢治作品の中でカラマツは短歌や文語詩には利用されず、また童話にもほとんど登場しない。文語詩は死の直前の1933(昭和8)年に清書されたものであり、それ以前に書かれた口語詩、短歌から改作されたものが多い。前述のように『春と修羅』作品群では、心に映じた景観をナチュラルリストの眼でスケッチしていた。晩年の賢治は詩人として、文語詩のような作品に、過去に観たものの中から詩的文学的なものだけを抽出して利用していた。心象スケッチにはカラマツが数多く描かれているものの、そこから文語詩に利用されたものは見られない。つまりカラマツは選択されなかったのである。このことは賢治にとってカラマツは「スケッチ」としては採集に値するものであったが、詩として描く対象ではなかったのである。「いわば詩による自分史」としての文語詩には「時を越えた目から選びとられた」(小沢1987)と述べていることを受けて、土岐(1990)が文語詩に残された植物と消えた植物を論じており、筆者らの視点に近い。

また岩手山麓を描いた文語詩は少ないことも、この地が主な舞台となっていたカラマツの登場しない理由であるとも考えられるが、これも近代的な牧野と防風林の作る明るい景観は晩年の賢治の抱いた詩情とは遠いものだったのであろう。

一方、白秋はカラマツに詩的な感情を抱き、それを「落葉松」として表現したのである。

## 7. 宮沢賢治の“装景”におけるカラマツの役割

賢治は、カラマツを既存の景観としてスケッチ

したばかりでなく、自ら風景にカラマツを加えていこうとも考えていた。

1924(大正13)年5月に、花巻農学校の北海道修学旅行が行われたときの賢治の復命書には、次のような記述がある。

車窓石狩川を見、次で落葉松と独乙唐檜との林地に入る。生徒等屢々風景を賞す。

蓋し旅中は心緒新鮮にして実際と離るゝが故に審美容易に行なはるゝなり。…

このあとに、生徒達が旅を終えて「北海道の風景、その配合の純 調和の単」に学んで「郷土陸奥の景象」の余りに暗く錯綜な田園を救って明るくするためには、農家の周辺にシラカバなどの樹木を植えることを考えるようになるだろう、という意味の記述が続く。賢治は、彼の理想の明るく美しく美しい田園景観には、明るい樹木が必要と考えていたのである。

賢治が“装景(造園での修景)”として、カラマツを植えることを好ましいと考えていたことは、次に挙げる賢治が書いた書簡や賢治の別宅を訪ねた菊池の回想記から明白である。

1927(昭和2)年4月の花巻温泉の富手一宛の手紙の中では、植栽すべきものとしてどんな樹種が良いかについてアドヴァイスしているが、そのなかに「ぎんどろと落葉松の混植最良観を呈す」とある。

また、菊池(1935)は1926(大正15)年の初夏に、賢治の花巻の下根子桜の別宅を訪ねてカラマツを見ている。そのころ、賢治はこの別宅を羅須地人協会としようとしていたところで、その別宅周辺に植栽を行っており、菊池はその玄関に至る道を回想して、こう描写している。

…小芝の生々しい路に出ると、もう先生の理想境が直感された。路にそうて短い落葉松がまばらに植付けられ、それもきれた向ふの端には銀どろが精よくのびて、風もないのに白い葉うらが輝いていた。



これと先の「ぎんどろと落葉松の混植」を勧めたことと対応させてみると、その組み合わせが同じであることが興味深い。

賢治は花巻地方の農村の風景が暗いと考えており、羅須地人協会において、その建物の前にカラマツなどを用いた明るい風景を造り、実例としていたのである。

## おわりに

賢治作品数多く登場するカラマツの多くは、岩手山麓の牧草地ないし放牧地の防風林であった。賢治はその景観を好んだばかりではなく、花巻周辺などの農村集落景観を明るく装景する<sup>5)</sup>ものとして植栽しようとした。

旅人として、また詩人としてカラマツを見た白秋とは異なり、賢治は生活者として、またナチュラルリストとしてカラマツを見ていたのであった。白秋が見た林はおそらくはカラマツの純林であったから、詩人はその中を歩み入り歩み去る己れを抒情的に詠った。賢治はカラマツの防風林の景観をナチュラルリスト（賢治自身はサイエンティストないしはエンジニアと呼ばれたかったらしいが）の眼で観察し、心象スケッチという形で記録し、またカラマツを用いて景観を造ることを考えたのである。

カラマツ並木や草地といった宮沢賢治の心を引きつけた景観の中に、現在も岩手山麓の諸地域や岩手県立大学が立地していることが作品や書簡などから理解できた。カラマツと草地と岩手山との組み合わせは岩手山麓を特徴づける景観であり、地域の遺産といえるだろう。今後とも現在の景観の維持・保全ならびに創出により一層取り組むことが地域の景観維持のため、またより豊かな学生教育の環境としても必要であろう。

## 注

1) 『春と修羅』第一集「樺太鉄道」ではカラマツの英語名であるラーチが見られるが、これは“色丹松”へのルビである。色丹松はグイマツの別称で

ありカラマツと同属、英語名は“Duhurian Larch”、千島・樺太・カムチャツカに分布している（北村・村田1979）。なお色丹松は『春と修羅』第二集の「つめたい海の水銀が」にも登場する。

- 2) 茨島野は文献によって名称や大きさが異なることがある。1876、81、82、83（明治9、14、15、16）年の岩手県統計書では“厨川野”として同じ大きさ、同じ地域の牧野が記載されており、同一のものであろう。一方、1879（明治12）年の岩手県管轄地誌や1887（明治20）年の岩手県統計書における「茨島野」は東西一里七町（約4.7km）、南北二里三十町（約11.1km）と記載されている。岩手県統計書および岩手県管轄地誌から整理した“茨島野”については島田（2005）に詳しく載せた。
- 3) 地誌学の権威であった田中啓爾（1929）は、当時日本領であった南樺太に関する記載の中で「夏軽井沢に避暑に行き珍しいと思ふ落葉松はこの樺太で自然に密生するものを浅間山の裾野に移植したものである。」と記している。しかし辻井（1995）は、カラマツは自生地ではしばしば美しい純林を構成し、この白秋の詩にその美が見事に描写されている、と述べている。浅間山の火山灰地に展開しているカラマツ林を舞台としたこの詩は、ニホンカラマツの代表的な自生地の描写であるという。このように、軽井沢付近のカラマツについては、同じ信州の天然林から採種育苗したという説以外に、サハリンからの移植といわれたり、天然林と説明されたりしているが、井出（1992）の見解が妥当ではないかと、筆者らは考えている。
- 4) 板谷（1979）は、ピネンやリモネンが一般にテルペン類と呼ばれる松脂の匂いの成分であることを記し、これを香料の竜脳と結び付けた幻想的でユーモラスな詩「春」を紹介している。目で見るとはなく、賢治は臭覚でもカラマツを捉えているのである。引用文中の「龍」にはドラゴンと振り仮名がある。

あゝ龍の香料か。あれは何でもから松か何か  
新芽をあんまり食ひすぎて、胸がやけると吐  
くんださうだ

- 5) カラマツはいわゆる陽樹であり、陽光のもとに明

るい印象を与える。賢治の「落葉松の方陣は」と始まる詩(別名「半陰地選定」)について、宮城・高村(1980)は「うすぐらい落葉松と栗の森林」の光景を描いたものと理解している。しかし、この詩は実は明るいカラマツ林とクリなどの暗い林との対比したものと解すべきである。

### 【付記】

本論文は、日本学術振興会科学研究費補助金(若手研究(B)研究課題16780015)および平成17年度岩手県学術研究振興財団研究助成による「自然地理・生態学的手法による賢治作品の分析とその環境教育への適用に関する研究」(代表者豊島正幸)の成果の一部である。同研究グループの各位のご協力・ご援助、ならびに査読者からの有益なご教示に謝意を表す。植物の和名と学名は『日本の野生植物 木本I』(平凡社1989)に準じた。

### 文献

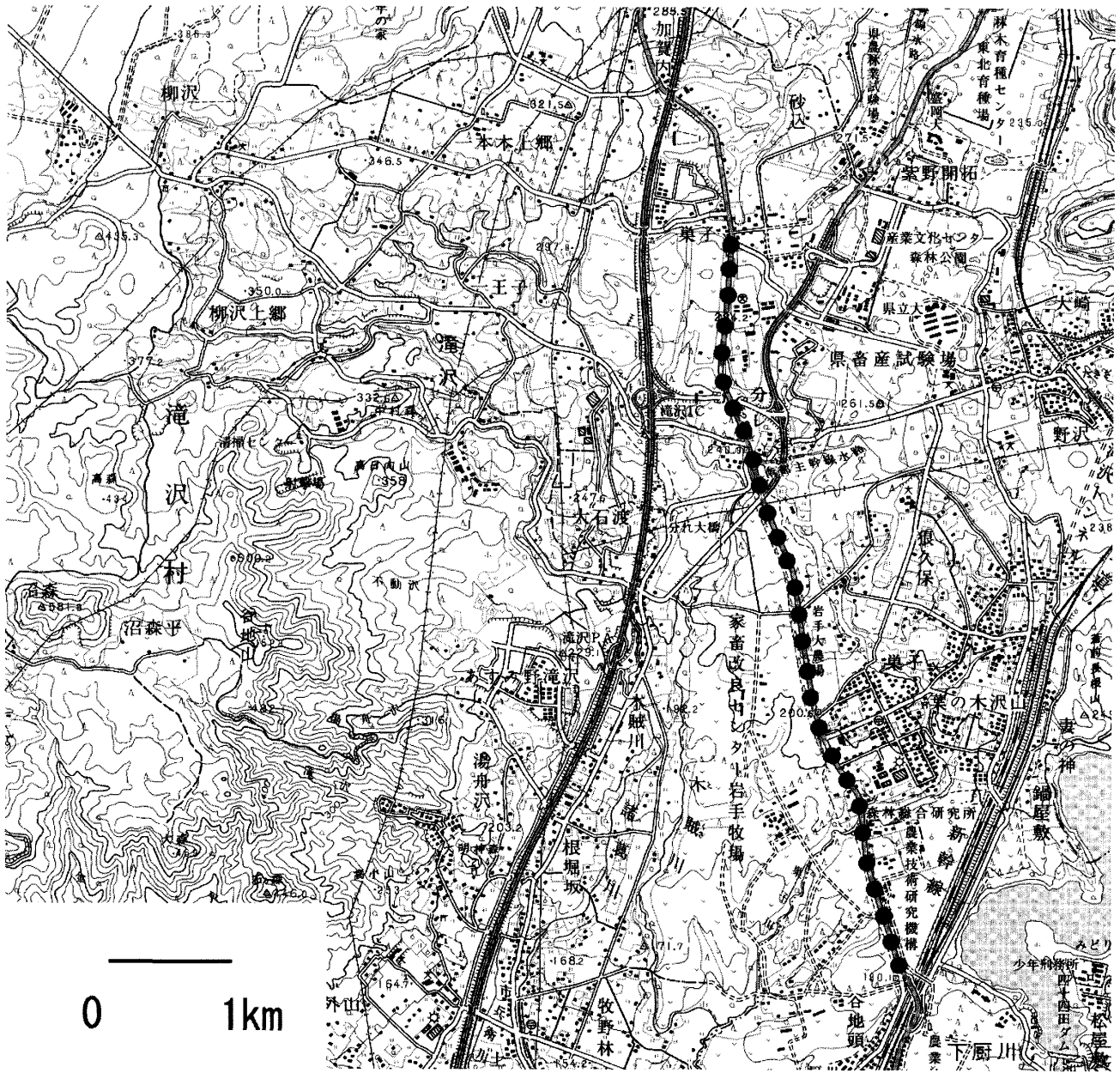
板谷英紀(1979):賢治博物誌。れんが書房新社。  
 井出孫六(1992):日本の風景を歩く 歴史・人・風土。大修館書店。  
 伊藤光弥(1998):宮沢賢治と植物-植物学で読む賢治の詩と童話-。砂書房。  
 伊藤光弥(2001):イーハトーヴの植物学。洋々社。  
 井原俊一(1997):日本の美林。岩波書店。  
 岩手県(1879):岩手県管轄地誌(2003年に東洋書院より復刻されたものを使用)。  
 岩手県(1876):岩手県統計書 明治9年。  
 岩手県(1881):岩手県統計書 明治14年。  
 岩手県(1882):岩手県統計書 明治15年。  
 岩手県(1883):岩手県統計書 明治16年。  
 岩手県(1887):岩手県統計書 明治20年。  
 岩手県(1902):岩手県統計書 明治35年。  
 岩手県(1905):岩手県統計書 明治38年。  
 岩手県教育委員会(1980):鹿角街道。  
 岩手植物の会(1970):岩手県植物誌。  
 遠藤公男(1994):盛岡藩御狩り日記。講談社。  
 岡澤敏男(2005):オークランドの旅人~賢治と滝沢村 155「詩編 滝沢野」、盛岡タイムス2005年9月29

### 日記事

奥田重俊(1997):日本野生植物館。小学館。  
 菊池信一(1935):石鳥谷肥料相談所の思い出。宮沢賢治研究。2。  
 北村四郎・村田源(1979):原色日本植物図鑑 木本編 II。保育社。  
 桜田恒夫(1996):賢治のイーハトーヴ植物園。岩手日報社。  
 島田直明(2005):岩手山麓における景観の形成過程-防風林・牧野の履歴から-。環境フォーラム。2。  
 下田一(2002):小岩井農場の森林造り 100年。熊谷印刷。  
 信州大学農学部林学教室編(1962):カラマツ林業。林業経済新聞出版部。  
 田中啓爾(1929):我らの国土。古今書院。  
 辻井達一(1995):日本の樹木 都市化社会の生態誌。中央公論社。  
 土井時久・米地文夫・増子義孝・三浦黎明・藤原隆男・菅田慶信・松本博明・後藤致人(2004):岩手種畜牧場の沿革。  
 福田武雄編著(1974):農民生活変遷中心の滝沢村誌。  
 三浦修・米地文夫(1999):宮沢賢治の作品にみられる植物と植物園-総合的学習を目的とした大学植物園の活用について-。岩手大学教育学部研究年報。59-2。  
 宮城一男・高村毅一(1980):宮沢賢治と植物の世界。築地書館。  
 森嘉兵衛監修(1979):岩手県農業史。  
 米地文夫(2006)賢治寓話「茨海小学校」とその背景-環境教育教材としての活用と関わって-。総合政策。7-2。(印刷中)  
 米地文夫・佐野嘉彦(2004):自然科学からみた宮沢賢治の「スケッチ」-「春と修羅」における天空の表現を例に-。総合政策。6-1。

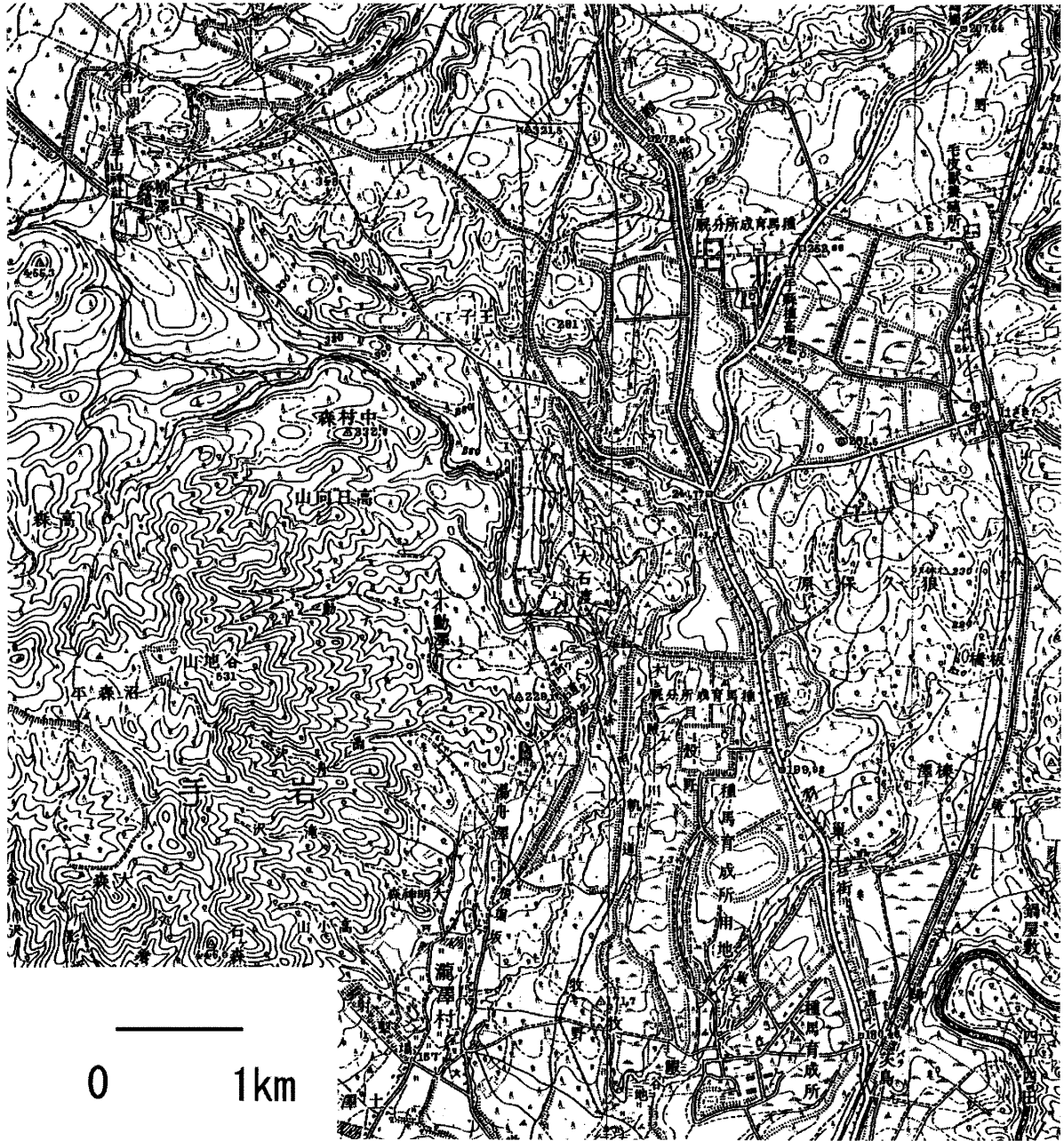
(2005年12月15日原稿提出)

(2006年1月31日受理)



付図-1 岩手山東麓の現在の様子

点線部分が岩手県環境緑地保全地域大正地。国土地理院2003年刊行 1/50,000地形図（盛岡）を一部改変。



付図-2 岩手山東麓の昭和14年地形図からみた様子

国土地理院1939 (昭和14) 年刊行 1/50,000地形図 (盛岡) を一部改変。

# Landscape of Japanese Larch Forests Described in the Works of Kenji Miyazawa:

## Comparison with the Poems of Hakushu Kitahara

Naoaki Shimada and Fumio Yonechi

**Abstract** The Japanese larch (*Larix kaempferi*) is a tree very frequently appearing in the works of Kenji Miyazawa. The author analyzed Kenji's descriptions of larch forests and their surrounding landscape and made a comparative review against the works of his contemporary, the leading poet Hakushu Kitahara. The author particularly focuses on larches depicted in a series of works in his mental sketches "Haru-to-Shura (Spring and Shura)." Many larch forests in these works are found to be windbreak forests in the meadowland and pastureland lying over the base of Mt. Iwate.

The authors supposed, judging from Kenji's works, that the base of Mt. Iwate in the 1920s was widely covered by grassland with larch forests grown in a columnar pattern circling the grassland. This estimation agrees with the landscape interpreted from the past written records, including former topographical maps and the statistics of Iwate Prefecture. This corroborates the fact that Kenji precisely described the landscape at the time of the base of Mt. Iwate in his work "Haru-to-Shura."

On the other hand, one of the well-known poems of Hakushu Kitahara, "Karamatsu (Japanese Larch)," may be one of his masterpieces, wherein he lyrically describes himself walking into and out of the larch forest, but it has no description of the landscape of the larch forest. In contrast, Kenji observed the landscape of the larch woods with the eye of a naturalist and described and recorded it in the form of mental sketches. Later, he even thought of "Soukei," in which he would create a landscape using larch trees.

**Key words** Kenji Miyazawa, "Haru-to-Shura (Spring and Shura)," Japanese Larch (Karamatsu), Landscape, Hakushu Kitahara